
ハイスクールD×D 兵藤家の妹?

秘密の君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 兵藤家の妹？

【Zコード】

Z6834Z

【作者名】

秘密の君

【あらすじ】

兵藤家に妹がいたらどうなつていいのか、と妄想して書いてみました。処女作なので、至らぬ点が多く、お見苦しい部分も多いと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

1・とある兄妹の朝の風景（前書き）

はじめまして。秘密の君です。

今回は、今まで妄想どまりだったネタを使ってみたく始めました。
更新はなるべく早く書くようにします。

主人公は兵藤 瑞（16）です。

それでは、私が作り出した「ハイスクールD×D」の世界をお楽しみください。

1・とある兄妹の朝の風景

「眩しい……」

私はベッドの上でつぶやいた。朝日がとても眩しい。とりあえず、ベッドから降りていつも通りお兄ちゃんを起しに行く。

お兄ちゃんの部屋のドアを開け放つ。

「お兄ちゃん。あつさだよ~。」

「ん~・・・。あと5時間。」

「学校遅れるよ~。」

反応がない。

「仕方がないな~。」

そう言つて私は部屋のいたるとこに隠してあるH口本を取り出し、「わ~、捨てよ~」今起きたすぐ起きた!!だから慈悲を~（泣）

「いつもいつもやらなことお兄ちゃんは起きないんだよね（笑）

「わかつたから、なかなかいでよ~お兄ちゃん~。」

私はウインクしながら言つ。やつあるとお兄ちゃんは安堵の息を吐いて

「いつも思つんだが、毎はいつも見て見つかるんだ?」

「ふつふつふつ。お兄ちゃんの隠し事なんて私の前では無意味なのがよ~」

「な、なんだつて……。」

実は、盗聴器と隠しカメラを設置しているだけなんだけどねー。そうとは知らずに

「何とこいことだ・・・。では、ビービーあれば・・・。ぶつぶつ・・・と、お兄ちゃんはつぶやいてる。

「早くしないと遅れるよ~。」

「ああ、やうだな。」

と、お兄ちゃんと一緒に一階に降りる。あ、そうだ。

「お兄ちゃん。今度の休日買い物つきあつてくれない?」

「あ～。」めん！俺その日データがあって。。。

ビシッ。と、私の周りの空気が凍る。そつとも知らずお兄ちゃんは話続ける。

お兄ちゃんはすぐうれしそうだ。うん。決めた。

「その人の名前教えてくれないかなあ兄ちゃん。」

「ええつとな、天野夕麻ちゃんつうんだ。

「殺そう。」

「いきなり何言つてんだ！？」

しまつた。つい頃に出でてしまつた。

大丈夫だよ。その人とは永久に会えなくなるだけだから。

いやいやいや、大丈夫じゃね？ たゞ！？ 落ち着け早まるな！」

お兄ちゃんをたぶらかす悪魔に死の鉄槌を・・・

頼むから、頼むから落ち着いてくれ！俺の初恋なんだ。
奪わない

でくれ！頼むから！」

私はその言葉に泣きたくなつた。

ל'ה'ג'ו

「えっ!? あ~。」 めんな。。。。(ょくわからんが謝るのが吉と

みた！』

「ぐすつ・・・・・お兄ちゃんはその人のこと大好き?」

「え？ あ、ああ。」

そんなに思つてゐんだ。じゃあ仕方ないね・・・。

「うん。わかつた。少しパーカつただけだから・・・。」

「そ、そ、うか（元気なくなつてゐるな・・・そ、うだつ！）」

一緒に買い物に行こうぜ！」

「えつ？」

「だから元気出してくれよ。な？お前が悲しそうなの見たくなえ
んだよ・・・。（理由はわからんが・・・。）」
たぶん、原因が自分だって気付いてないんだろうな・・・。でも・・・

「うんわかった。」

心配してくれたし嬉しいからいいつか。

「でも、譲りはしないからね・・・。」

だつたら、こっちに振り向かせるまでの二つ！

「ん？なに、ぶつぶついつてるんだ？」

「な、なんでもない！（汗）」

「？」

よかつた気付かれなかつた。

「さてそろそろ行くか。」

「あっ。待つてお兄ちゃん！」

そうして私たちは学校へ向かつた。

私たちの運命の歯車はこの日を境に狂つてしまつた。

1・とある兄妹の朝の風景（後書き）

「少し寂しいな。

君もあらかじめ落ち着いて

穂「で、次回はお兄ちゃんと彼女さんのデートの話なんだよね?」
吾「やあして。(降)一笑(笑)」

「えー!? 違うのーへどつなるで

君「次回、『闇に伏せる兄妹』お楽しみに」

6

2・闇に伏せる兄妹（前書き）

さて、2話目です。

そこまで進んでいません。

できたら、感想などをお願いします。

2・闇に伏せる兄妹

学校前、いつもお兄ちゃんに登校していると、

「よう！一誠。」

「おはよう。一誠。」

「よひ。」

「おはようございます。」

いつもお兄ちゃんとつるんでエロ三人組と呼ばれる人たちだ。

「一誠。エロDVD貸してやるよ。約束だつただろ？」

そう言つて、鞄からDVDを堂々と白昼にさらす。

この品性が感じられないこの丸刈り頭はお兄ちゃんの友人の松田君。まあ、よく騒ぐ人だ。

・・・悪い意味で。

「今日は風が強くてロリ少女のパンチラが揉めた・・・。生きててよかつたよ。」

と言つて、中指で眼鏡をずり上げる。

人間として危ないと思うこのカツコつけて話しかけてきたのはこれまたお兄ちゃんの友人の元浜。

メガネを通して女性を見ると体型を数値化できるらしい。

私もされそうになつたことがあつたな。もちろん、瞬殺したけどね。実は、私は運動神経抜群なんだよね。陸上部の男子に短距離走で勝つたこともあるし。

「ああ。いいやいらね。」

「なんだと！？エロさん。お前が・・・体調悪いのか！？」

「そうだぞ？お前おかしくなつたか？」

「ちげえよ！彼女ができたから要らんつーただけだ！」

「・・・」

一人が黙つてしまつた。あ、耳ふさいど！。

「な、何だと――――――――――！」

ふさいでてもこの威力。どうからそんなに声が出てくるのだろうか？

お兄ちゃんは・・・あ、くらくらしてて大丈夫かな？

一 ばかな！口をこの。いのお前がそんな馬鹿な——！——！」

神はしない
神はしなくなってしまつたんだ
。。。

と「人とのつながり状態はなっていません」と

「まあ、負け組は負け組らしく吠えてやがれ。はつはつはつ。」

「死ね！！！」

廊下で騒いでいるのもいたなあ

わざと授業授業」と

休日

お兄ちゃんのデートをつけてみたけど、お兄ちゃんの彼女は意外にもかわいい子だった・・・。

確かにあれなら惚れても仕方ない気がする

お兄ちゃんのこと奪うるかなぁ……

公園に今、かすかに香る花が咲き、
はつ、天下へ、ミハ、それは秋天下

私共の園の裁かい方では、おまかせのところが、おまかせのところです。

一人の声が聞こえてくる。

「ねえ、死んでくれないかな？」

・・・は?何言つてゐのあの子?私の聞き間違いかな?

お兄ちゃんもそう思つたらしく

「……え？ その……あれ？ ゴメン、もう一度言つてくれな

「死んでくれないかな？」

お兄ちゃんの彼女の背中に黒い翼が生える。

まるで、黒い天使の翼みたいなものが。

そう考へていると彼女の手に光る槍？のよつなものが握られていた。
それを無造作にお兄ちゃんに投げつけた。

グサッ

お兄ちゃんのおなかにその光る槍が刺さる。

「「え？」「

お兄ちゃんの声と私の声がハモる。

私は自分で気付かない間にお兄ちゃんの近くに駆け寄っていた。

「お兄ちゃん・・・？」

返事がない。

お兄ちゃんのおなかから赤い液体がドクドクと流れ出す。

「い、嫌…………！」

「あら？ あなた彼の妹さんだっけ？」

夕麻という彼女が話しかけてくる。

ふざけるな・・・。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「ふざけるなあ…………！」

お兄ちゃんの・・・敵…………

私は飛びかかるつとする。

「殺す・・・。殺してやる！！」

「あはっ。残念、それ無理。」

彼女は笑顔でそう言い光の槍を投げつけた。
かわせない。

グサッ

「（）ふつ・・・。」

やられた・・・？でも、倒れない。倒れてやらない！

「あら？立つていられるなんてすごいわね。でも、もう無理でしょ
？」

「ふふふ。」

そう言って彼女は闇の中に消えていった。

その声を聞いて私の意識は遠のいた。

その瞬間、私の視界に紅の髪が入った。

そして声が聞こえた。

「死にそうね、傷は・・・へえ、おもしろいことになつていいじや
ないの。あなたたちがねえ・・・。おもしろいわ」

意識はそこで遠のいた。

そして私はその日、人間の死を迎えた。

2・闇に伏せる兄妹（後書き）

毬「え！？死んじゃったよ！私達死んじゃったよ！？」

君「そうだね～。（にやにや）」

毬「え？何？何なの？」

君「まあ、次回を楽しみに・・・。」

毬「すぐ気になるのーー！」

3・兄と妹との魔の道（前書き）

さて、一冊の内に二話目を更新することができました。

まあ、いつもの如くあまり進んでないんですがね。
明日にはオカルト研究部のところまで行きたいな・・・。

3・兄と妹との魔の道

「マリ side . . .

「う・・ん・・・・。」

私は目覚まし時計の音で起きた。
いつもはすぐにおきれるのに、近頃は朝がめっぽう弱くなつた。
何でだらり?・

「さてと、ほんとに起きないと。お兄ちゃんも朝がさりに弱くなつたし。」

そう呟きながら、私はお兄ちゃんの部屋へ向かつた。
昨日はエロ三人組のメンバーと一緒に何かやつていたらしい。
何をやつていたかは簡単にわかつてしまつのが少しかなしいけどね。
・・・

ずいぶんと夜遅くまでいたらしいからいつ帰つてきたかわからなかつた。

「おっはよー。お兄ちゃん?」

私はお兄ちゃんの部屋のドアを開け放つた。
そして見てしまった。

裸のお兄ちゃんと紅髪の女性を。

イッセー side . . .

き、聞いてくれ!俺酒飲んだりしてなかつたはずなんだ。(当然の如く)

それなのに、隣に俺の憧れの女性、リアス・グレモリー先輩が寝ていたんだ!
う、嘘だろ・・・。記憶にないのに俺は初体験してしまつたのか!?

「な、何たる不幸・・・」

「ん・・・」

ああ――――どうしよう――

「ん――。あら、あなたもう起きてたの?」

「っ――お、お姉さま!お胸が見えていらっしゃるのですが!?」

俺は毛布で下半身を隠しながら床に座った。

「あ、あの、お胸が見えていらっしゃるのですが?」

「あら、見ただければ見てもいいわよ。」

「っ――なん・・・だと・・・。」

日本語にそんな素敵な言葉があつたのか!?

鼻血が出そうだ。

「で、でもなぜここにいるのですか?」

「あなた、昨日のこと覚えてない?」

え? 昨日のこと?

確かに、悪友二人と一緒にエロエロと一緒に見てて、なぜ俺らに彼女ができるのか、という話になり時間が遅くなつて、一人で帰り道を歩いていて・・・

「確かに、変な男とあつて・・・そうだ!夕麻ちゃんと同じような翼が生えていて、俺の腹に光の槍みたいなものを・・・つて、あれ? 傷は?」

「私が駆け付けなかつたら、あなたは今頃無となつていたわよ。傷は深かつたから私がここまで運んで魔力で治してたつてわけ。」

「そ、そなんですか? て言つか何で裸なんですか? それにあの男は何者なんですか!?」

「えーと。まず前者の質問。魔力が裸のほうが渡しやすいため。で、後者の質問は、あいつらは墮天使。」

欲に負けて天使から墮ちたもの達よ。」

な、何を言つてるんだこの人は!?

「まあ、詳しいことは学校で話すわ。後で使いを出しておくから。」

先輩がそういう瞬間俺の部屋のドアが開け放たれ、

「おひはよー。お兄ちゃん？」
と言ひながら毬が入ってきた。

ビシツ

その瞬間、空気が凍つた。

の様なものが、

卷之三

俺は渕の上には冷や汗をかいてゐる

なあー？（怒）

ひい
い、
いや、毬落ち着け
な?」

私はリアス・ケレモリイ
あなたたちと同じ私立駒王学院の三年

せ、先輩…色々とほしょり騒ぎです…

ああ、
穂からさらさら黒いオーラが！

ま、毬が先輩に襲いかかっている！危ない！！

一〇〇

「へぶつ」

おお
先輩に華麗にかわしている！

そして琶はヘッドは頭から突き込んでいたぞ！」

「何だ！この泥棒猫！！

「お、落ち着け毬！」

俺は球を羽交い絞めにした。そうしないといつ飛びかかるかわから

ないからな。

先輩は制服に着替えた後、驚くべきことを言った。

「あなたたちは、一度死んでるわ。転生して悪魔になつたのよ。」

3・兄と妹との魔の道（後書き）

毬「何よこの泥棒猫！－！ガルルル……」
君「ま、まあ。落ち着きたまえ。（ダラダラ）」
毬「お兄ちゃんの真操を……許さない……。」
君「まあ、あまりにも怖いので次回予告『悪魔達の喧譑』
毬「お楽しみに？あの女……ぶち殺しかけていね
君「ひいっ」

4・悪魔達の喧騒（前書き）

さてついに毬の神器が姿を現しました。

いつもより多く描いたの絵少し疲れています。

今日中にもつ一話いけたらいいな

4・悪魔達の喧騒

「マリ side . . .

・・・は？

何を言つてゐるのこの人？頭がおかしくなつたの？
お兄ちゃんもどり反応すればいいのかわからないのかポカンとして
いる。

私たちを気にせずリアス先輩は、

「まあ、さつきも言つたけれど、詳しいことは学校でね。
と、言いながら鞄を持つ。

「あなた達、早くしないと遅れるわよ。」

あ・・・、

「ヤバい！早くしないと遅れちゃうよ。お兄ちゃん！」「お、おお
！そうだな。」

そういうながら、私たちは急いで準備をする。
この後、一階でお母さんとお父さんが騒いだのはいつまでもない。

「「いってきまーす。」」

そう言つて、私たちは玄関から飛び出でいった。
・・・あの泥棒猫もいたけど。

（学校）

まあ、登校中もいろんな人が騒いでいた。

エロ三人組のメンバーの一人ももちろんからんできた。

お兄ちゃんはその一人に意味ありげな笑顔で、

「なあ、生乳つて見たことあるか？」

と言つていた。

あの女・・・。

どうしてくれようか・・・。

そうだなあ、まずは気絶させてそこから色々と世間に公表できないようなことをしまくつて・・・。

「セメント・・・太平洋沖・・・沈める・・・ブツブツ・・・」

「お、おい毬さん? どうしてそんな危険なフレーズをつぶやいているのでせうか? (ピクピク)」

あれ? 気付くと私の周りからみんな2メートルくらい離れて一ひらを見ている。

お兄ちゃんもその中にいたので、

「どうしたのお兄ちゃん?」

私は最上級の笑顔で聞いてみる。

「あ、ああ。よかつた。いつも毬だ・・・。」

とお兄ちゃんは、安堵の息をついている。

どうしたのかな?

そのまま学校に着いた。

あの泥棒女はわざと行つてしまつていなくなつてたんだけじね。

イッセー side・・・

さつきの毬は阿修羅に見えてしまった。

本当に怖かつたな・・・(汗)

まあ、そんなこんなで今は放課後になつてしまつた。

先輩が言つていたことが気になつて、授業がまともに頭に入らなかつた。

しばらく待つと、

「兵藤一誠君と、毬さん。いるかな。」

声のしたほうを向くと、うちの学校で人気のイケメン木場祐斗がたつていた。

うちのクラスの女子がいろいろと騒いでいる。

「キヤー! 木場くうううん!」「」「」「」

くそっ、イケメン死ね！！

俺はとりあえず木場のもとへ向かつた。

「Mari side . . .

木場という人が私たちを呼んでいた。多分、リアス先輩の使いとは彼のことなのだろう。

お兄ちゃんは、

「何のようだ。」

と実に、不機嫌そうに木場君に話しかけた。

お兄ちゃんはイケメン嫌いだからね。

木場君は気分を害した様子はなく、

「ええとね、リアス・グレモリー先輩の使いで「OK、OK。すぐ行くよ」

お兄ちゃん・・・。そこまで先輩のことがいいのかな？

どうすればいいかな・・・あの女からこいつに振り向かせるためには？

とりあえず、木場君の後をついて行くと、

「汚れてしまうわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカツプリングは許せない！」

「あの女木場君と・・・ブツブツ」

と、腐った視線と殺意がこもった視線が私たちに向つて放たれてい る。

木場君と私は無視しているが、お兄ちゃんはゲッソリしている。

理由は腐った視線のせいだろう。

しばらく歩いていると洋館みたいな建物が見えてきた。

「ここに部長がいるんだよ。」

そつ言いながら中に入していく。

上に看板の様なものがあり、オカルト研究部と書かれていた。

中には、映画に出てくるような魔術の道具やら、魔法陣が書かれて

いた。

さらにソファー、テスクがいくつかあり、ソファーに誰かが座っていた。

「ん？あれって確か……思い出した。

「ども……」

と言いながら手に持った羊羹を食べていた。
確か名前は塔城 子猫さんだったはず……。

「ここにちは。」

と私は笑顔でいさつし返した。

そういうえば、わざわざからシャワーの音がする。
よく見てみると部屋の中にシャワーがありタオルの向こうから誰か
が浴びているのが見える……。

・・・・・はー？しまった！お兄ちゃんが凝視している！
とつづりあえず私は急いで田隠しをした。

向こうから話し声が聞こえる。

片方はあの女だが、もうひとつは確か姫島 朱乃先輩だったかな？
そして一人とも出てくる。

私はお兄ちゃんの田隠しをとる。お兄ちゃんは少し残念そうな顔を
して、

「毬、何で田隠ししたんだ？」

と聞いてきたので、

「お兄ちゃんが、いやらしく田つきしてたから。」

そう言つと子猫さんが同意するようにウンウンとうなずいていた。

「あらあら、はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以
後、お見知りおきを。」

と笑顔でいさつされた。

「さて、もう知っているとは思つけれど私はリアス・グレモリー。
この部の部長よ。」

そう言つと、

「これで全員そろつたわね。兵藤 毬さん。一誠君。いえ、マリと

イッセーと呼ばせてもううわ。」「は、はい。」

「はい。」「はは。」

まあ、別ひじり呼ぼうとかまいませんが・・・
「私たちは、あなた達を歓迎するわ。」

「え、あ。はい。」「はい。」

「はい。」「はい。」

お兄ちゃんは、たゞたゞしく答えるので精一杯らしい。
そう考えていると、

「悪魔としてね。」

爆弾発言をされた。

イッセー side ・・・

そのあと、朱乃さんから、お茶をもらい、色々な話を聞いた。
なんでも、墮天使と悪魔は地獄の霸権を争っているとか、墮天使と
悪魔を問答無用に襲いかける天使。

しかも女子と付き合つていてるとか夢が本当だつたとか。

しかも、女子と付き合つていた子が墮天使とか、俺たちが殺されそ
うになつたのは神器を持つていたから。

昨日襲われた話を聞いたとき、毬が

「お兄ちゃんを殺そつとするなんて・・・万死に値するねそいつら。
・・・」

と、少し危ない発言をしていた。
皆さんのが少し驚いてるよ。

「ブツブツ・・・・。」

毬は何かつぶやいている。その中、

「ねえ、イッセー。マジうじちやつたの?」
と、聞いてきた。

あ、そう言えば言い忘れてた。

いえね、毬は昔から俺に何かあるとあんな感じになっちゃうんで

卷之二

「そうなの……。話を戻してもいいかしら、マリ？」

「ハジハジ……え!? あはは、すしめせん

次に神器について説明された。なんでも、俺達の中に宿っていると

「……お前が外の方でいい

で、神器を発動させるためには、その人が一番強いと思ふ物の姿をイメージするの。イッセー、やつてみて。」

一翻強一怒が：：：ゆうぱく

「一瞬猶二時半……。」ラグ・ホールの叫び聲には……。

「ジカラ子の姿三真以ノト。

「え! 今! 」 どうか?

ルノア。

な、なんてこつた・・・。この年になつてドラゴン波を撃つ真似し

なければならないなんて
・・・
・・・

にはしゃあ・・・

俺はエリソン波の格好をした。

「ハヤシ。ミラガノ、彼女は力を解放する。」

叫んでやつた。ナ。

ん・・・?「おっ! ?なんだ俺の腕が光ってる!

「それがあなたの神器よ。」

これが……俺の左腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のやうなものがあつた。

「マリ。あなたもよ。

えつ二三歳の母器があつたのか!?

毬もびっくりしたよつな顔をしている。

「は、はい！」

そう言いながら、毬は俺と同じような恰好した。

あれ？ 毬つてドラグ・ソボールきらいじゃなかつたつけ？

卷之三

「あら、マリ。イッセーと同じボーズなのね。」「え、少しちます。」

え、何が違うんだ？

「何が違うの？」

端もわざと遅いために、

「これはお兄ちゃんが最強と思ったボーズを最強と考えてボーズをうつんでるので、まつきつ言えばお兄ちゃんのまんです。」

「そ、そつなの。・・・。」

少々びっくりしてしまった。

たって、俺より強い毬が、俺を『最強』っていうんだぜ。驚かなくてどう

「一概ます。デーラー、ドーリー、シーピー

そう叫んだ瞬間、穂の体が光に包まれた。

MATERIALS

うわ～。びっくりした～。

私の体が光に包まれた後、私の両手首、両足首、首に十字架の様なアクセサリーが付いていた。

「これが、私の神器？」

みんな、すごい険しい顔をしている。

「ねえ、マリ

「は、はい。何ですか？リアス部長？」

「おまえが恐い、恐い體してたた

「あなた、体に異変とか無いの?」

「へ？ ありませんけど・・・？」

「そうなの？ おかしいわね・・・。」

「あのどうかしたんですか？ 私。」

「そんなに真剣になられると逆に怖い。」

「そう思つていて、朱乃先輩が、

「悪魔にとつて、聖なる道具という物は弱点の様なものですね。十字架も悪魔には触つただけで激痛を及ぼす代物のはずなのですが・・・。」

つまりは、私は神器とはいえ十字架を触れて激痛を感じないおかしな状態にいると・・・。

「ヤバいんですかね・・・？ 私。」

少し怖くなつてしまつた。すると、お兄ちゃんが私の首に付いている十字架のネックレスに触れてきた。

「お、お兄ちゃん！？」

「部長。俺が触つても激痛起りませんし、この十字架が特別なだけなのではないでしょうか？」

お兄ちゃんがそう言つと、

「そうなのかしら？ でも、そうなのかもしれないわね。」

とみんな納得してくれた。

「ありがとうございます。お兄ちゃん？」

とこりで、

「そう言えばどうしてリアス部長は私たちが死んでるつて氣付いたんですか？」

「そう聞くと、

「それはコレのおかげよ。」

と、一枚の紙を取り出した。

その紙には、こう書かれてた。

『あなたの願い叶えます！』

そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。

「これ、私たちが配つていいチラシなのよ。これは、私たち悪魔を

召喚するためのもの。最近魔方陣を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないにの。こうして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配つてゐるの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配つていたの。それをイツセーが手にした。そして、墮天使攻撃されたイツセーは私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かつたんでしきうね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけれど」

「阿櫻がへこ私なあが」

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で墮天使に害されたのだと察したわ。イッセーとマリは死ぬ寸前だつた。そこで私はあなたの命を救うこととしたの。悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わつたわ。」

へえ、なるほどね。

「じゃあ、ひと段落ついたところで、改めて、紹介するわね。裕斗」「僕は木場裕斗。イッセ君とマリちゃんと同じ一年生ってことはわかっているよね。僕もあくまです」「

「……………。」塔城子猫です。……………。惡魔です。」

も悪魔ですわ。うふふ」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、マリ、イッセー」

「 せこつ 」

と大きな声で返事をした。

4 悪魔達の喧騒（後書き）

「私の神器おかしいじゃない！作者どうしてくれるのよ！」

君、おしゃれそれに體調でしょ」「

卷之二十一

き物語は始ま る。

毬一ハケニてんじせないわよ!!!!

卷八

5・悪魔とシスター（前書き）

豫定です。

いやー酷い！！

もうへたくそになつた気がします。

5・悪魔とシスター

「マリ side . . .

「さて、紹介も終えたし次は悪魔について詳しく話そうかしら。」
リアス部長は、そう言うと私たちを見て、

「まず、悪魔の中ではあなた達は転生悪魔の部類に入るの。たいていは下僕としてひどい扱いを受けてしまうわ。私はそのよひな扱いにはしないけどね。」

「なぜですか？」

そう聞くと、部長の代わりに木場君が答えてくれた。

「それはね、部長の家のグレモリー家は悪魔の中では少ない眷属を大切にする悪魔なんだ。だから、僕たちはこの人に会えてよかったです」と言えるよ。」

「へえ、そうなんですか・・・。」

「じゃあ私たちにはラッキーなんだ。」

少しうれしいな

少し浮かれていると

「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だつているわ。最初は皆、素人だつたわ」

あ、やっぱりそうなんだ。みんな一からのスタートなんだね。

お兄ちゃんは不服そうにしていると、

「やり方しだいでは、モテモテな人生も送れるかもしねないわよ？」
と、リアス部長が爆弾発言をした。

もちろんお兄ちゃんは、

「どうやってですか！？」

即座に反応した。あまりの反応の速さに、反射の域にいつているね。皆、お兄ちゃんの反応の速さに少し驚いていた。

リアス部長は、

「純粹な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのため、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前のような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまったけれど。それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなつた。悪魔にも人間同様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかる。悪魔という存在は極端に出産率が低いから。それでは墮天使に対応できない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」

と続けた。

あれ？ 結局下僕じゃないですか。
お兄ちゃんもそう思つたらしい。

「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転生者　つまり、人間から悪魔になつた者にもチャンスを与えるようになつたのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう」と。そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちみたいに人間社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イッセーやマリも知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違つていたと思うわえ！？ そうだつたの！？ 私も気づかず悪魔とすれ違つてしたりしたんだ。

少し怖い・・・。

「ええ。もつとも、認知できる者とできる者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困つている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちは召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイッセーのように私たちの存在を信じない者も多いけど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

そうかもね～。私はすぐ信じたけど。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかからざこなうサザン

ପରିବହନ

うわっ！いきなり叫んでびっくりするじゃん。

「お前たのめんなやん?」

「マジか!! 俺が!! 俺がハーレムを作れる!? 」、 ハーレムとして

「もいんですよね！？」

お兄ちゃん……。そこまでだと、流石にひくよ。私でも。

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

お二つとも、お二人ともおおきなお手紙を頂きました。おおきなお手紙を頂いたことは、これまで初めてです。

おツツ！－！悪魔、最高じやねえか！何、これ！何、これ！チョ－テ

ハジミン上がってきただよ! いおなら秋風の日本も捨てられ

アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやつていける

！それとこれは別だ。うん、別だ！だから捨てない！前言撤回！

アーティストの歌

「フフ。おもしろこわ、この子」

「そうですか？」

「あらあら。部長が先ほどおつしゅつておられた通りですわね

おバカな弟としつかり者の妹ができたかも」 だなんて。」

そういう風にリアス部長の目に映つてたのかあ。

まあ、否定はしないけど。

「いや、否定しろよ！」

「うわっ…いきなり私の思考を読まないでよ…お兄ちゃんとはいえ
プライバシーの侵害だよ…」

「う…すまん…」

「よし許す…」

あ～樂し

「とこうわけで、イッセー、マリ。私の下僕とこうわけでいいわね
？大丈夫、実力があるならいざれ頭角を表すわ。そして、爵位をめ
らえるかもしない」

「はい、リアス先輩！」

「違つわ。私のことは『部長』とよぶ」と

「部長ですか？『お姉さま』じゃダメですか？」

「お兄ちゃん…・・・はあ。」

「何でため息つくんだよ毬？」

「別に…。」

お兄ちゃん。そんなに部長のことが好きなのかな…・・・。

「つーん。それも素敵だけれど、私はこの学校を中心に活動してい
るから、やはり部長のほうがしつくりくるわ。いちおつ、オカルト
研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」
「わかりました！では、部長！俺に『悪魔』を教えてください…」
お兄ちゃん…・・・。動機が不純すぎ。

「フフフ、いい返事ね。いい子よ、イッセー。いいわ、私があなた
を男にしてあげるわ」

といつてお兄ちゃんのあ「」をなでるリアス部長。

「部長！お兄ちゃんの貞操は妹の私を通してからにしてください…
さすがにそこは譲れない！譲っちゃいけない…！」

そう叫んでリアス部長と、お兄ちゃんを離した。

お兄ちゃんは、

「ハーレム王に俺はなるつ！」

と叫んだ。

「はあ・・・・。」

これからは苦労が多そう・・・。

イッセー side・・・

その後、部長から悪魔の基本的な事を教わった。まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。なんで夜中かといふとそっちの方が悪魔の力が發揮されるからだそうだ。

悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。

だから、夜になると色々と強くなつた感覚があつたのか。

あと、朝がさらに弱くなつた理由も悪魔になつたからだそうだ。

悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いらしい。

俺と毬が朝が弱くなつた理由も悪魔に転生したてだから日の光に慣れていなかつたかららしい。

ついで、俺も毬も悪魔になつて日が浅いから、まず悪魔社会の仕組みについて勉強しないといけないらしい。

あ、あとは学園についてだ。

俺の通つてる駒王学園は部長の領土になつてるらしい。

学園の偉い人たちも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらない。つまり学園は部長の私物みたいな感じだ。

そのおかげで夜中に学園に集まるるんだな。

そして話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎の機械で点滅してお宅に届ける。

この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。毬が某ネ口型ロボットのように音を口づさんでいた。

携帯ゲーム機似でそれプラスタッチパネル式だ。

なんか、悪魔ごとに入間界で活動できる範囲は決まつてゐらしくて、

その範囲内でしか仕事。

つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。

だから悪魔の活動時間はよるだけらしい。なんでも昼は神やら天使やらの時間なんだということだ。

ある日の放課後

「失礼します」

俺たちには一も通り
部室へ入って行つた

一
來たわね

部長が俺たちを見たとたん、朱乃さんに指示をしていた。何だろうか？

「はい、部長。じゃあまずはイッセーくん、魔法陣の中央へきてください」

「え？ あ、はい。」

俺は、恐る恐る魔法陣の中に進む。

「イッセー、マリ。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくかんばったわね」「

笑顔でいってくの端。おおー、やつと終わつたのか! 毬もうれしそ

うにしている。

「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらいうわ。」

「おおっ！俺達も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が一件入ってしまったの。丁度いいからマリとイッセーにいつてもらうわ。」

やつた！ついに・・・ついに！俺の願望がかなう時だ！

俺の足元の魔法陣が光り始めた。

「あ、あの・・・」

「黙つていて、イッセー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

「そうなんですか・・・。何かパソコンみたいだな」

「そういえば、部長が眷属悪魔にとつてこの魔法陣は家紋のよつなものだつて言つてたな」

つまり、呪喚するもの、契約を結びたいものにとつて、これが俺たちを表す記号になる。

魔力とやらの発動もこの「魔法陣を絡めたものになるんだと。木場たちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ」

俺や毬はそれよりも先に魔力コントロールから始めるといけないらしい。

「イッセー、手のひらをこちらに出してちよつだい」

部長の指示どおりに俺は左手を部長に向ける。

すると部長が俺の手のひらをなぞる。なぞり終えたら、俺の手が光り出した。

よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、いまのは魔法陣を書いてたのか。

「これは転移用の魔法陣を通して依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

「えー、便利だなー。」これさえあればいろんな所へ行けるわけだ。
魔法陣があればの話だけど・・・。

「朱乃、準備いい？」

「はい、部長」

そういうて朱乃さんが魔法陣の中央から離れていく。

「さあイッセー、中央にたつて」

部長にそう促され、俺は中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。
「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。
到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行つてきなさい！」

そして俺の体の周りが輝きだした。

「Mari side . . .

うわ！お兄ちゃんの体が光ってる！

まぶして見えない。私が腕で目を隠していると光が弱まってきた。

私は魔法陣の方向を見てみる。

・・・え？・・・お兄ちゃん何でいるの？

周りをみると、リアス部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、朱乃
先輩は「あらあら」と残念そうな顔をし、木場君はため息をついて
いた。

「・・・イッセー」

部長が目を点にしているお兄ちゃんを呼ぶ。

「はい」

お兄ちゃんは何が何だか分からないって顔をしていた。

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプで
きないみたいなの」

「え！そんな、なんで！？」

「魔法陣は一定の魔力が必要なだけだけど・・・。これはそんなに

高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」えーと、その話から考えるとつまり、

「つまり、イッセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イッセーの魔力があまりにも低すぎるので」

な、なんだつて——！

つまりお兄ちゃんは役立たずということになるよね？

「な、なんじゃそりやあああーー？」

お兄ちゃん……私はかわいそすぎて泣きたくなつた。

だつて、あんなに出世したがつてたのに、役立たず認定つて……。

「・・・無様」

ぼそりと無表情で呟く子猫ちゃん。

やめてあげて！かわいそつだから。

すると朱乃先輩が困り顔で部長さんに尋ねる。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長

「イッセー

「は、はい」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イッセー！」

「はい！」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へいつてちょうどいい」

「あ、足！？」

あ、その手があつたか！

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」

「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」

ビシッ。

無言で子猫ちゃんが指を指す。

「ほり、こきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」

そう言われてお兄ちゃんは出て行つた。

えーと・・・。

私は？

「あなたは魔法陣で行つてもいいわ。」

「え！お兄ちゃんは！？」

「後から来るから大丈夫よ。じゃあ魔法陣の中央に向かって。」

できたら、お兄ちゃんと一緒に行きたかつたなあ。

リアス部長から魔法陣をもらつて、

「マリ。がんばってね。」

「はい！」

そう言つて、私は光に包まれた。
ん・・・。

あれ？知らない家だ。やつた。

「転送できた――――！」

「うわっ！」

あ、いけない大声出しちゃつた・・・。

「えーと、グレモリーの使いの者です。あともう一人後から来ます
が、先に用件だけ聞きたいんですけど？」

「え！あ、あ。えーと確かに子猫ちゃんで要望したんだけど？」

「あ、すいません。子猫ちゃんに一つ依頼があつてそれで片方に代
わりとして私が派遣されました。」

「あ、そうなの。じゃあ、金持ちに出来る？」

「あ、少し待つてください。えーと、それだと対価が命になつてしまつんですが、よろしいですか？」

私は最上級の笑顔でそう言つた。

「いやいやよくないよーじゃあ、ハーレムは？」

「えーと、あ、それでも同じですね。」

私は最上級の（）

「まじかよ・・。じゃ、じゃあれ君の体は？」

「ああ、すいません。やつらのにせそれ担当の悪魔がいますのでそちらに。ついでに『ひとつひとつ』と『ひとつひとつ』、魂じと滅ぼしますよ？」

私は怒氣を含めた笑顔で言つた。

「ひ、ひー」

あら、すじこ怯えている。

（ピンポーン）

「あ、連れがきたみたいですね。中に入れさせていただきます。」

イッセー-side・・・

やつと着いた・・・。
さて中に入るか。

（ピンポーン）

「すいませ～ん。リアス・グレモ「お兄ちやん御苦労さま。や、早く早く！」ま、毬一何でいるんだーー？」

「ん？先に転送してきてたんだ。」

なん・・・だと・・・。

「妹に負けた・・・。」

そのあと色々とあつたが割愛させていただいへ。

後日～

「はあ。」

「お兄ちやん。過ぎたるは及ばぬが」しだよー。」

親指を立てて笑顔で言つてきた。

「だつてよ～契約取れなかつたんだぜ。部長には迷惑かけちまつた

し・・・

「で、でもさ、一応ほめてくれたじゃん。それで良しこいつよー。

ね。」

「やうだな。次がんばるか。」

「うそうん。その意気だよ。」

「心配せんて悪かつたな。」

そう言つて、俺は毬の頭をなでてやつた。

「うひゅー。」

毬は目を細めて喜んでいる。

(猫みたいだな)

そうやつてなでていると、

「ん？あの子・・。」

毬が何か言つているので見てみると、

(エリで、劇的ビフォーアフターのテーマ曲を脳内再生してくださ

い)

何といふことでしょう。やうせ、金髪の超美少女がいるではない
ませんか。

シスター服を着て、少し子供っぽさを残した顔。

そんな子が困ついたらどうします？やることはないつー

俺は女の子の近くに行き膝をついて、

「何かお困りですか？」

あくまで、紳士的に聞いてみた。

「え、あのー。近頃こちらに来て、目的地に行こうとしたんですが、
そしたら道に迷つてしまつて・・・」

毬が女の子の持つている髪を見て、

「何だ近くじゃない。ねえ、お兄ちゃん。案内してあげない？
そう言つたので、

「やうだな」

と、俺は同意した。女の子は、

「い、いえつ！そんなご迷惑をかけられません。」

と遠慮してきた。

「いいのいいの。旅は道ずれ世は情けつてね。ね、お兄ちゃん。」「ああ、やうだぞ。遠慮しなくていい。」

そう言つと、

「ありがとうございます。あ、私アーシア・アルジョンと申します。」

「あ、俺、兵藤一誠。んでこいつは「妹の毬です。」ようしくな。

「はー。よろしくお願ひします。」

そう言つて俺たちは歩きだした。

しばらくすると、少年が泣いていた。
どうやら、膝をすりむいたらしく。

アーシアは、近づくと、

「大丈夫ですよ。」

と言ひながら傷に手をかざした。
すると、淡い緑色の光が発生した。
あれは・・・、

「神器だよね。お兄ちゃん。」「ああ。」「ああ。」

どうやら毬も同じことを思つていたらしい。
少年は親に連れていかれた。

そのあと、アーシアの過去について聞いた。

・・・なんだよそれ・・・

「酷いねそれ・・・。」

毬とは考えがよく合つ。

やはり、兄妹だからか？

そう思つてみると、教会に近づいてきた。

「うう・・・」

なんか、すごい寒さを感じた。

毬は、怖いのかブルブル震えている。

「大丈夫か毬？（小声で）」

「うん・・・。」

そうとは気付かず、アーシアは、

「ありがとうございました。イッセーさん達に会えたのも、髪のお

導きのおかげでしょう！おお！神よ！」

ぐわっ！アーシアがお祈りしたため、激痛が走る！

いつて――――――！

毬も頭を抱えている。ここには兄である俺が何とかしなければ！

「アーシア。大丈夫だから早く行きなよ。（俺たちのために！）」

「え？あ、はい！本当にありがとうございました！」

そう言つてアーシアは教会へと、走つて行つた。

俺らは急いでそこから離れた。

あー。死ぬかと思った・・・。

5・悪魔とシスター（後書き）

毬「怖かつたよ～お兄ちゃん～。」

一「ハイハイ。怖かつたな。」

君「さて次はいよいよ、バトル！」

毬「え？ そうなの？」

一「聞いてねえよ！」

君「毬の駒もわかります。次回『闇に潜みし影は・・・』お楽しみに！」

毬「気になる・・・。」

一「同感。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834z/>

ハイスクールD×D 兵藤家の妹?

2011年12月25日16時48分発行